

郷土

第 5 号

平成 7 年 3 月 20 日

編集・発行／宮本常一記念事業策定審議会
東 和 町 役 場



3月23日

東和町ふるさとづくり講演会

＝ 演 題 ＝

科学と文化

広中平祐氏略歴

1931年山口県由宇町生。県立柳井高校卒業。
1954年京都大学理学部卒業。コロンビア大学、
ハーバード大学。京都大学教授を歴任。

現在

(財)数理科学振興会理事、京都大学名誉教授、
ハーバード大学名誉教授。

フィールズ賞 (Fields Medal)、文化勲章を受
賞。日本学士院会員。

1984年 (財)数理科学振興会を設立し、以来
その基金の充実をはかり、次の世代になう若
手研究者への助成と育成に力を注いでいる。

略歴

1964年 コロンビア大学教授

1968年 ハーバード大学教授

1970年 「複素多様体の特異点に関する研究」
でフィールズ賞受賞

1975年 文化勲章受賞

1983年 京都大学数理解析研究所所長(～85年)

1984年 財団法人数理科学振興会、設立代表

1991年 財団法人数理科学振興会、理事長
京都大学名誉教授

1992年 ハーバード大学名誉教授

講師

広中平祐氏



熱心に聴講する出席者の皆さん。
町内の中学生の出席もあり、会場
は熱気に包まれました。

一つの目標を定め

徹底的に努力してみよう

人の一生を左右するような影響を他の人から受けるにはいろいろなケースがありますが、私の場合は、皆さん方も夜海岸に出て歓談する様な事もあるかと思いますが、東京から帰郷した叔父から、海岸に誘われニュートンの「深く暗い海の底へ潜り手探りで真珠貝を採ってきて、太陽の光の下で輝かせる事ができた時の喜びに譬えられる様なものが、科学者の探究心を支えるものにも通じている」という言葉とその解釈を聞かされたのがきっかけになり科学者に憧れるようになったのです。

京都大学に湯川博士がおられましたので、物理の研究をしようとして入学後1年半位徹底的に勉強しました。布団を敷いた足元に机を置き、疲れたらそのまま倒れ込むようにして就寝し、目が醒めれば直ぐに勉強を始めるという風でした。そうすると、そのなかで自分の特性が判ってくるものなのです。自

分には物理ではなく数学が向いているのがハッキリ認識できました。数学は世界の鏡であり、私には方程式が非常に美しいものとして目に映っていました。高校・大学どの時期であれ徹底的に勉強に打ち込んでみることで、目標をもって努力すれば色々な物事に対する価値観が明確になってきます。このことを若い皆さんに人生の先輩としてお伝えしておきたいとおもいます。



会場からの「中学生に対してのコメントを」との要望に、学生とは勉強さえしていればいいという非常に羨ましい身分であり、とにかく一生懸命勉強して下さいとの言葉があり、それを語るひとにより、ごく「普通の言葉」が大変印象深いものになるものだと思銘を受けました。

これからは科学が文化になる時代です

これからは、科学が文化になる時代です。しかも、日本においてそれが非常に明確になるでしょう。

地域の文化・国の文化というのは永い伝統、独特の生活習慣、その人間関係に即した感情・感性により、それぞれが築きあげられていくが、科学は国際的に地域・民族の特性を離れ、共有の知的財産として蓄積されますので、ときに文化と相反するものとして捉えられることもあります。しかし、科学を研究する人も文化の中から生まれる訳ですから、パスツールの「科学に国境はないが科学者には祖国がある」という言葉にもあるとおり、科学が文化になりえる素地が必然として在ることになります。

良い土壌となって、科学―工業―産業―経済へと結び付き、まして私が渡米していた頃はケネディ大統領が10年後には星条旗を月に立てると国民に約束した頃でもあり、私たち数学者も数々のプロジェクトに加わって色々な業績を残すことが出来、大いに国力の発揚を実感することもできました。工業国が成熟すると文化の時代に移っていきます。

科学というのは、東を見て西に進むと言われております。

ヨーロッパからアメリカ・日本・アジアへと、科学或いはそれを支える数学は世界共通語で書かれていますから、どんどん伝播していきます。そして文化の本来本元ともいえるインド・中国等にも今後最新のテクノロジーが取り入れられていく時に、正に科学が文化の一部として位置付けられていくのではないかと、21世紀とはそんな時代ではないかと考えています。

大きな流れとしてヨーロッパから新しく建国されたアメリカに科学が移っていった時に、アメリカでは全てが白紙から始まる訳ですから、科学が発展するには非常に

テーマ 文化の薫る町

ふるちの文化を高め

ふるちを愛し

ふるちを育む

海から見た東和町

春のセミナー開催

海は、昔から私たちに生活の糧を与えてくれたほか、私たちが他の地域と盛んな交流を重ね、文化的・経済的な発展を遂げるための「海の道」としても重要な役割を果たしてくれました。

しかし、高度成長期以後、こうした海とのかかわりが薄くなってきているため、町では、若者たちが古来から今までの島における生活文化を具体的に学ぶ伝承活動を行ってきました。

本セミナーでは、こうした伝承活動を報告しながら、過疎化・高齢化社会にある東和町が「今後、何を大切にして町づくりをするかを考えていこう」と、去る、三月二十五日・二十六日、総合センターにおいて「春のセミナー」を開催しました。

このセミナーは、平成四年度と六年度、日本芸術文化振興会の助成を得て「老人から学ぶ、島の漁



開会に際しあいさつする
西木町長

法保存伝承活動事業」の一貫として開催したもので、平成四年度にはまず全体計画を策定し、島における年中行事や生産暦・伝統芸能の調査、農耕用具・漁具などの収集と復元を実施してそれらの記録作業を行いました。

平成六年度では、石風呂・亥の子・雲助など伝統行事の保存・体験活動として稲作・機織り・わら細工・釣針の製作・漁船の収集と復元・船大工道具の収集と造船技術を記録するなどして全体を整理し、今回のセミナー開催に至ったものです。

印南 敏秀 先生 (愛知大学助教授)

かつて石風呂は、保健治療・憩い・体験学習など人々の生活に必要な存在でした。

今、石風呂は各地で復活していますが、地域の文化に合った形で復活させ、総合的に活用しながら地域を考えて見ることも必要なのではないでしょうか・・・



須藤 護 先生 (放送教育開発センター助教授)

東和町は、普通の集落と違い横の連携が強い横社会で、分家する場合比較的平等な形で土地を分けています。そうすると農地の細分化により徐々に生活できなくなるので、技術を身につけて外へ出る。早くから積極的に交流する社会が出来上がっていたようです・・・



宮坂 卓也 先生 (テム研究所主任研究員)

瀬戸内海は、魚が豊富で沿岸漁業に適しており、近くの都市に新鮮な魚を供給できる優位性が「楽しく暮らせる町」につながった。その「楽しく暮らせる」という基本的な教育がこれからもっと望まれるように思います・・・



真島 俊一 先生 (テム研究所所長)

今回、春のセミナーのコメントーターを務める。

川添 登 先生 (早稲田大学客員教授)

宮本先生は、東和町誌を書くために学問研究したのではないのか？ 「郷土で郷土を学ぶ」それが日本をそして世界を学ぶことになる。それが「宮本常一先生の視点」であった。そう考えると、東和町は今住んでいる人だけのものではない・・・

柿本 皓 先生 (下関水産大学教授)

国では、資源管理、種苗放流、漁場づくりの三本柱で、日本沿岸漁業の振興を推進しています。特に、漁場づくりは、複雑な魚貝類の生態系を考慮した魚礁や築磯の方法が必要なのはいうまでもなく、山から、河、海を含めた複合的な自然保護も大切なのです・・・

田村善次郎 先生 (武蔵野美術大学教授)

人が、外見では辺境と思える所に住むのは、そこに住む人の知識や技術が活かしているからではないのか？ ただ過去を懐かしむだけでなく反省してみる。そして、町外のような知恵を集める。今後の生き方や方向が見つかるかもしれません・・・

松本 昭司 先生 (沖縄県水産取締役)

瀬戸内海は、マダイやハマチ、アジ、メバル、フグ、タコなどのほか多くの魚種が豊富に生息しています。そして、早くから1本釣が盛んでした。また、普通魚は適温を求めて移動し気象の異変に左右されるそうです・・・

中堀 均 先生 (佐渡郡小木町教育委員会文化財課長)

「住めば都とは、今居る所を都のようにしたい願いを含んでいる」と宮本先生がご教示下さいました。また、「過去を粗末にすると、将来、良いものはできない」というのもあります。東和町も貴重なものをいい形で残して欲しいと思います・・・



村上武吉公の (内入) 記念碑設置

宮本常一記念事業（会長東和町長西木宏）では、町内の史跡を明確にし永く町の誇りとするため記念碑・案内板の設置事業を推進しています。

平成5年度には、佐連・五条間の牛が首にシーボルトの上陸記念碑を設置し、6年度は、内入の元正寺に村上武吉公の記念碑と案内板を設置しました。

武吉公は、戦国時代に中国地方を統括していた毛利公に忠誠を貫き通した武人で、瀬戸内海の雄としてその勢力を誇っていました。戦国時代、信長軍と戦った一説を紹介します。



内入の元正寺境内に設置された村上武吉公の記念碑と説明板

戦国の海戦

信長と武吉

内入 岩本 重雄

日本地図に群雄割拠時代の武将達を並べてみると、戦国の動乱が四百年前とは思えないほど、当時の活躍ぶりが目に浮かんできて伝記とともに痛快である。

信長の周辺には有名武将が顔を揃えており、反信長派の諸勢力が一度に立ち上がったから信長は激怒した。四面楚歌、どこを向いて

も敵であった。

「おれが天下人たり得るかどうかは、これらの武将に勝つかどうかにかかっている。秀吉！本願寺をつぶしたら貴様に毛利征伐を命ずる。俺の命も後九年、俺が日本を平定しなければだれにもできん。俺の最も憎悪する朝倉・浅井から叩きつぶしてやる。」

信長は、半年間休む暇もなく戦い続け危機と窮地の中に生きてきたが、延暦寺の焼き討ち宣言以来一向宗の土民軍によって強力にさえぎられてしまった。その勇猛ぶりと果敢さはかつて信長の経験以外のものではあった。

敗走して岐阜城に戻った信長は怒りが噴き上げてきた。

土民軍に敗れるとは？一向宗とは何だ。なぜ土民軍はあのように強いのか？潰さねばならぬ。石山本願寺を亡ぼさねばならぬ。

信長は直感力で、行動する一向宗徒の闘争理念をとらえた。

「滝川！熊野の海賊を味方に引き込め。雇うのではなくこの信長の家臣に加えるともうせ。織田の水軍にするのだ。」熊野の海賊である九鬼水軍はついに納得して承諾した。

天正二年（一五七四）七月、信長は九鬼水軍に海上から長島攻撃



内入公民館前の案内板

を命じた。夜に日をつぐ攻撃であった。一向一揆軍は耐えきれず完全に手をあげた。

八月三日、降伏を申し出たがこれを許さず全員焼き殺されてしまった。その数二万。しかし、一向宗の本拠地は依然として力を持っていた。

これらを指揮していたのは石山本願寺の頭如上人であった。これには反信長の武力的背景があった。中国の雄毛利一族がおり、内海に棲む全水軍の勢力が控えていたからである。

天正四年（一五七六）七月、本願寺は毛利輝元に武器や食料の輸送を依頼した。大阪湾から木津川を逆行すれば城中にそのまま搬入できるのである。城にこもる僧侶と土民軍は一万五千。対する信長の攻撃兵力は三千である。九鬼嘉隆は配下の水軍三百隻余の全勢力を率いて木津川河口で待機した。

同年七月十三日、毛利水軍は瀬戸内海最大の拠点であった淡路島の岩尾城に結集した。その数、実に八百隻。岩尾から或る潮流で集まれば二時間で木津川に達する。朝靄の立ちこめる十五日の朝、大阪湾にその姿を現した。井楼を装置した唐船型の大船十隻を中心に小船三百隻を配置した九鬼軍であったが、海上を圧する村上武吉率いる海賊船を見て呆然としてしまった。

村上水軍は火矢、ほうろくを縦横無尽に飛ばして走り回り、さらに柴を積んだ船に火をつけてそのまま突っ込ませた。小船の活躍乱舞する隊形は実に見事であった。

海戦は短時間で終了した。九鬼水軍は多くの戦力を火の海に失った。毛利勢の運んできた食料は悠々と石山城に運びこまれた。

城中から高らかな勝ち時の声が、完敗した信長はその声を聞きなが

らも萎縮はしなかった。方策はあるはず。瀬戸内海制圧のために、本願寺討伐のために、あと七年に迫った残存生命の如何なき燃焼のために。九鬼と瀧川に「村上水軍に勝つための工夫をせよ」と難題を押しつけた。

天正六年（一五七八）六月十五日、伊勢を発した船は七月十七日堺港に入り信長の視察を受けた。「よく造った！」賞賛の言葉であった。

天正六年十一月六日、村上水軍は再び六百隻余の大船団で食料輸送をかねて来襲した。

湾頭には予想通り九鬼水軍が待ち構えていた。

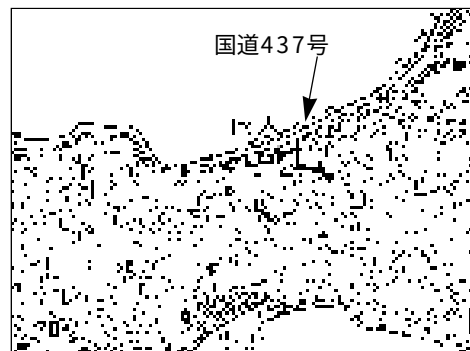
しかし、いずれもが小船であった。「何のことはない一挙に蹴散らしてしまえ！」武吉一行は湾内に進んでいった。

小船が引く、更に追う。ついに河口から石山城近くまできた村上軍は挟み打ちにされてしまった。

背後からはすさまじい爆裂音がとんできた。と同時に二隻ばかりがバラバラに砕かれて散った。

そこには鉄の島が浮かんでいて、鉄の島が動き砲弾を打ち込み、木っ葉微塵に吹き飛ばしていく。

村上水軍は遂に恐怖のどん底に落ちてしまった。隊形をも乱れて海



の底に沈んでいった。村上水軍は潰滅した。

孤立した石山城も間もなく落ち一向一揆は平定された。そしてその二年後に信長は本能寺の変で自殺している。

＊ここに登場する黒船と呼ばれる鉄甲船は、多門院日記によると「人数五人ほど、横七間、縦十二・三間もある鉄の船なり」とある。

＊「ほうろく」とは、武吉公が発明したもので一種の手榴弾である。

白木公有地に

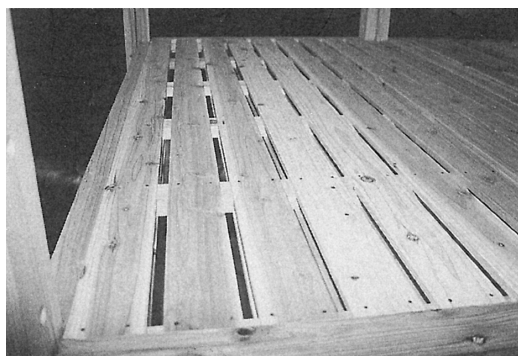
収蔵庫完成

このほど長崎の白木港公有地に生産用具保存のための収蔵庫が完成しました。

この収蔵庫は、重要有形民俗文化財「周防大島東部の生産用具保存施設」事業として、平成四年度から事業が進められており、総事業費は約三億円。鉄筋コンクリート（RC）、一部木造（W）造りで床面積は約一、一五三㎡、縦横とも約三十四mの建物です。

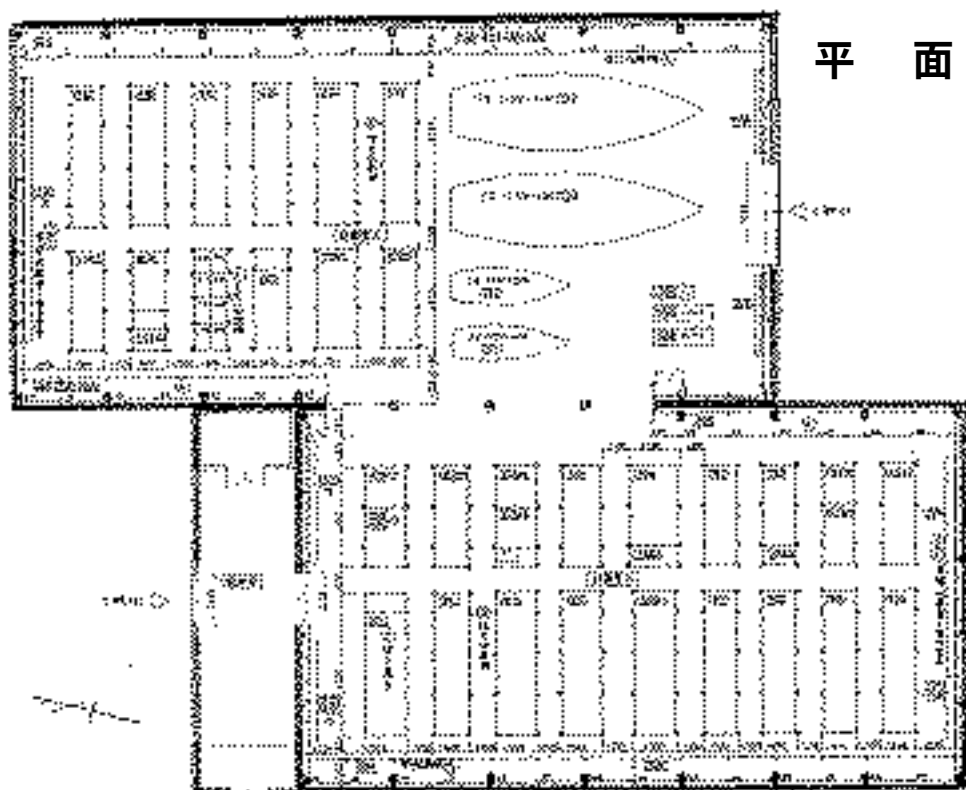
一枚岩のプレキャスト工法

この収蔵庫の特徴としては、床全体が一枚岩のようになったプレキャスト工法を用いており、地盤



展示棚は湿気を防ぐ工夫がなされている。

平面図



国道437号線



四隻の船が収蔵される広いフロアー。正面の扉から船が搬入される。

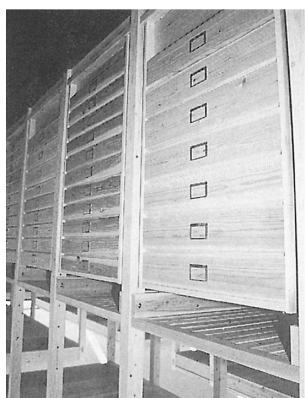
が比較的ゆるい埋立地に適した工法を採用しています。

この工法は、地盤が揺れても建物全体のキシミやネジレが少なく経費的にも安価という利点があります。

湿度・温度・塩害防止

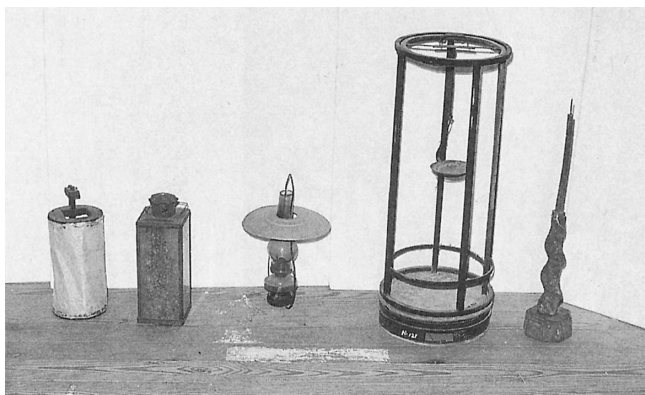
壁は、外壁・中壁・内壁の三重構造で、床下全面には高さ約2mの密室空間を設けて外部と遮断されており、極めて湿気を寄せ付けない構造となっているほか、保存する用具に適した温度調節施設や塩害防止対策も考慮された建物に仕上げられています。

また、保存用の棚も格子状にな



小さな用具はそれぞれ収納できるようにになっている。

収蔵される灯火用具



っており、出来る限り湿気を寄せ付けないように施行しています。

保存用具 三、四六五点

保存する生産用具は、重要有形

民俗文化財の三、四六五点。

乏しい平地と海と山に囲まれた島特有の自然環境下で、先人たちが一生懸命営んできたそれぞれの用具からそれぞれの時代の諸相が

収蔵される周防大島東部の生産用具

大 分 類		小 分 類	点数	合 計
1	自然物採集用具	ア 山菜等採集用具	1 2 0	1 2 6
		イ 海藻等採集用具	6	
2	漁携用具	ア 漁 具	2 5 6	4 3 3
		イ 船・付属品	1 2 2	
		ウ 漁具製作・修理用具	2 3	
		エ 水産加工用具	3 2	
3	農耕用具	ア 水田農耕用具	7 7 3	1,0 3 3
		イ 陸畑農耕用具	2 6 0	
4	畜産用具	ア 飼育用具	4 0	5 6
		イ 着装用具	1 6	
5	養蚕用具	ア 飼育用具	5 4 3	6 0 1
		イ 収穫・処理用具	5 8	
6	紡織用具	ア 木綿織用具	2 3 1	4 7 7
		イ 絹織用具	2 4 6	
7	手仕事用具		7 8	7 8
8	諸職用具	ア 家大工用具	2 2 0	4 0 5
		イ 宮大工用具	4 3	
		ウ 船大工用具	4 7	
		エ 桶屋用具	9 5	
9	運搬用具		4 7	4 7
10	仕事着		1 1 3	1 1 3
11	飲食・灯火用具	ア 携行食用具	5 3	7 1
		イ 灯火用具	1 8	
12	信仰・儀礼用具		2 5	2 5
総合計			3,4 6 5	

伺えるように、自然物採集用具や漁携用具、農耕用具など体系的に十二の大分類に分けて整理保存する予定です。

用具で島を知る

また、職種に応じた生業用具か

ら、この地方で営まれてきた生業の実態と変遷推移を知る上で貴重であるばかりではなく、瀬戸内海に浮かぶ数多くの島々における生業や習俗を知るための比較資料としても重要な用具でもあるのです。保存される用具の体系は別表のとおりです。



温度や湿度の影響を柔らげるため、板材は自由に動く。

宮本常一先生を偲ぶ

宮本常一先生を偲ぶ水仙忌が宮本先生のご命日の一月三十日、先生の墓所の西方神宮寺で行われました。

この水仙忌は、郷土大学生や先生にゆかりのある人々が「故宮本常一先生を偲びながら先生の教えを改めて再確認し、町が目指すべき真の発展とは何かを考えていく」と始められたもので今年で四回目。

この日の参加者は、先生との思い出や町の発展のためには何をすべきかなど話に花を咲かせていました。



先生を偲ぶ参加者

郷土の歴史とは何か

第4回郷土大学講義録より

年貢と古い村の在り方

源平時代の大島郡の様子を話したい。歴史を調べてみると、大きな政治的変動があるときには、大島郡もその中に巻き込まれている。源平合戦のころにも、ある意味で揺れ動いていた。

大島町の屋代荘は、嘉祥二年（八四九年）に安部成清が拓いた。それ以前から皇室の領地があったが、それ以外の土地を拓いた。これを、名田という。

しかし昔は、「土地を支配していても世間に認められないと誰かに取られるかも知れない」というのが風習であった。それを自分のものであることを示すために、天皇に仕える藤原氏に寄進した。そうすると藤原氏の荘園になるが、藤原氏が屋代に来て治めるのではなく、名前を貸す、そうすると名前の貸料をとる。それが「年貢」である。これが律令国家が崩壊し

はじめた後に見られた日本の土地の在り方の一つの姿であった。

ギリシャ、ローマでは、奴隷を使って農場の経営を行っていた。やがて、奴隷が少しずつ目覚めてきて農奴にかわる。このようにしてヨーロッパ社会は発展していくが、日本では、年貢を上に払って自分たちの安全を守ってもらう。こういうシステムは、日本の国を考えるのに大事なことと思う。

後に、安部氏の下の名主が力を持ってきた。安部氏自身は本当は力は無くなるが、しかし、日本の国の政治を司る天皇に仕える藤原氏が安部氏の上にいると他の人は悪いことはしなかった。それで平和が保たれる。これが古い時代の村の在り方であった。それが崩れてくるのが戦国時代である。

東方と西方

島末荘は最勝光院領で平家に味方している。それがわかるのは今の下田八幡宮が出来る前に厳島神社があった。昭和の初めまではあ

ったのです。これは、平清盛が安芸守になった時にその神社の領地には必ず厳島神社を祭っていた。つまり平家と関係が深かった土地であることを示しているのです。

そのため、島末荘の最勝光院領は源頼朝に取り上げられてしまい地頭職が置かれたのです。

地頭は幕府が任命してその地域の警察権を持ち、税を取り立てる権利を持っていた。その上に国ごとに守護職が置かれた。守護は軍事権を持っていた。地頭が置かれたわけは源義経を捕らえるため、頼朝はそれを後白河法皇に申請して得た。地頭は鎌倉の御家人が多く、周防国にも当初たくさんやってきた。頼朝は、最勝光院領を地主職の大江広元に与えた。地主職は領家もかねていた。

この後、大江広元は藤原親康という代官を島末荘へ派遣した。彼は長崎にいたので、後に長崎氏と言われてくるのです。

島末というのは広いので、二つに分けて東方と西方にした。平野の祇園様を境に二つに分けた。東の中心は、おそらく和田であったと思われる。そして二つに公文職を分けたが都合が悪いので、孫の光親が東西兼帯惣公文になった。二つに分けながら、両方を同時に

治めた。

東大寺と周防国

話は変わり、俊乗坊重源が、東大寺を再建する大きな使命をうけまして、周防国へ下ってまいりました。事情をくわしく申し上げますと、源頼朝は神仏を深く信仰した人であつたので、平重衡が東大寺を焼いた後、一時も早く寺を復興させなければいけないと考えた。

一方、後白河法皇も復興に熱心で、頼朝にできるだけ早く再興するように命じている。一番の適任者である法然上人に東大寺再興を仰せつけるが、法然上人は政治に巻き込まれることを嫌って、弟子の俊乗坊重源を推挙した。重源は優れた人で、三度中国の宋へ勉強しにいった、帰ってくる時に東大寺南大門・鐘楼、三月堂の向拝の部分などを造った陳和卿（ちんなけい）という建築家や伊行末（いぎようまつ）という石工を連れてきた。この石工は、日本の花崗岩を刻むノミを作ってそれを復活させた。こういう人達を連れてきた。

さて、重源は寺を建てる費用をつくらなといけなかった。普通国司は四年が任期ですが、東大寺のような大きな寺を建てるのは四年ではできないので彼は周防国を

知行国にした。この場合は、東大寺が周防国を買い取るのではなく、長く支配する権利を認めてもらうことであつた。

周防国で何が一番多く必要であつたかといえますと、それは材木であつた。大仏を安置するのに必要な柱の長さは百尺ないといけない。一本の木で百尺、約三十メートルもある木はどこにもなく、佐波川の上流の湯野という所にあつた。ところがそれを切るのは大変で、また、運ぶのも大変であつた。運ぶための麻縄作りに周防国の百姓が駆り立てられた。そして、佐波川の河口から筏に組んで帆をつけ、大阪の淀川をさかのぼって、やがて奈良坂を越えて東大寺へ持つて行つた。とにかく大変なことであつた。

周防国と地頭

周防国は源平の時に飢饉であつた。その後にこのような大事業が周防国の人のかかつてきた。ところがそれだけではなく、重源が周防国に來た時に幕府の地頭が略奪を繰り返していた。そこで重源はたまりかねて朝廷に訴え、朝廷はさらに鎌倉に報告した。それで頼朝は周防国の地頭を全部引き上げさせた。

これは周防国にとって大事なことであつた。戦国時代に鎌倉系の地頭がいなかった周防国では戦争がなかった。それで、山口にあれば立派な寺や宮が残つた。そういうようにみると、重源が地頭を周防国から追い払つたことが、戦国時代の終わりまで戦争らしい戦争のない地域社会を作り上げた。これは、我々が気がついていない間に、民衆が民衆の自覚によって自分等の住みよい社会を作るように努力していったのではないかと思う。

歴史というのは、こういうことが重要である。毛利元就一人がでてくることではなく、優れた知性を持った人達が、その時をどう守るかという決心に立つて、それを組織化して行くことに本当の平和がある。そのことを鎌倉時代の初めに周防国を支配した人たちに、はつきりとした思想的に一つのいしづえをみた。それが今日まで生き続けているのではなからうか。

武士の社会と民衆の歴史

これを幕末から明治維新を見ると大変良くわかる。長門国には、地頭がいたと同時に、萩を中心に萩政府、そこから非常に多くの人材が出てくる。そして、明治維新

を迎えるが、その時周防側を見ると武士で活躍した人はいなかった。最も大きな活躍をしたのは、大村益次郎。彼は百姓である。もう一人は、伊藤博文である。彼の父は熊毛の庄屋であつたが、足輕の株を買つて萩へ移つたので、もとの武士ではない。そのほか、大島郡からでた世良修蔵にしても百姓であつた。周防側の武士で立派な肩書を持ち明治維新に活躍した人はいなかった。ほとんど百姓といつてもよいのではなからうか。そのもとは、鎌倉の初めに武士を排除した制度を打ち立てたことであつたのではなからうか。

歴史というのは、息の長いもので、今我々がどういう世の中を作つていけばいいのかわかることは、実に大きな事で、けつして目の前の事ではなく、百年、二百年先の事。この場合では八百年ですが、そのいしづえの積み重ねのよさ、その理想的、文化的な息の長さというものは、八百年は続くというところを歴史は我々に教えてくれます。八百年間の歴史は、決して遠い過去ではなく、実は今にそのまま生きてつながっている。政治の歴史は、一代で終わるが、民衆の歴史は、長く生き続けるものです。

編集後記

一月の阪神大震災で被災された方々のご冥福とお見舞を申し上げます。

さて、昨年の夏は少雨で深刻な水不足に見舞われ、改めて「水」の大切さ、自然の偉大さを思い知らされました。

また、先般の阪神大震災や地下鉄サリン事件のほか、地球上の各地域ではいろいろな事件が渦巻いており、世界平和や環境保護の気運が徐々に広まる中で、今、私たちはいったい何をすべきなのか一考してみることも大切に思います。

日本には、はつきりとした四季があり、私たちは四季折々の文化や風情を楽しんでいます。灼熱の国や厳寒の国に比べたら暮らしやすいように思いがちですが、そこに暮らす人々はその環境や文化を楽しみながら人生を楽しく過ごしているのではないでしょう。人生八十年時代の今、改めて私たちの生活とは何か、人生とは何か再考してみたいものです。